

# 安楽寺マンガ通信

との36 信楽めくみ作

一月の行事、バレンタインデー



「バレンタインデー、近年外国の行事が日本ではますます流行ります。ただ、私は日本の行事も大事にしたいと思っています。」

一月の行事、日本の行事はいろいろ

皆さんは節分のごじょうごが知っていますか？



節分は「無福を払い福を招く」といって、豆まきをする。今年の節分は2月3日の土曜日に決まっています。お正月の飾りも、節分には「福」を招くために「豆まき」をする。



季節を分ける日です。毎年は二月三日に決まっています。お正月の飾りも、節分には「福」を招くために「豆まき」をする。

日本人は外国の行事にも目を向けて、日本の伝統も大切にしていきたいと思いませんか。



昔からある日本の行事にも目を向けて、日本の伝統も大切にしていきたいと思いませんか。

## 孤独について

信楽慧

今回は「孤独」ということについて近頃思うところをお話したいと思います。

この「孤独」というテーマは前回のテーマ「無条件の信頼」と少し関わるところです。

近年「孤独」を感じている人（20代～40代）が増加しているそうです。アメリカのシカゴ大学の調査によると、何でも打ち明けられる相手の数をゼロと答えた人数が、1985年に比べ3倍にも増加しているというのです。

僕も都会で仕事をしていると孤独を感じることも多く、この結果を実感しているところです。そして、この「孤独」を忘れるために、絆や繋がりを手軽に実感できるドラマ、SNS、インターネットのコンテンツにのめり込んでしまうことが増えるのだと思います。皆、多少はそうした孤独感を持っていると思いますが、なぜ昔に比べこれほどその孤独感が増加したのでしょうか。

この「孤独」から逃れるためには「信頼感」を育てることだと思います。これが前回お話した無条件の信頼の重要性です。信頼といえば、家族、友達など周りの人との信頼関係を思いませんが、それは外への信頼です。それも大切ですが、もっと大切なのが内への信頼です。つまり、自分を信頼すること。自分がコミュニティや誰かにとって必要な存在であることを認識することです。関係者の中でお互いが必要としていることを認識することが大切だと思います。そして、その内への信頼で一番大切なのが、仏さまに願われている私に気づくことではないかと思えます。

## 安楽寺仏教婦人会会員募集並びに降誕会のお弁当取りやめについて

安楽寺では仏教婦人会を組織し、毎月活動をしています。毎月の例会では仏事・作法の話や普段疑問に思っていることを何でも気軽に話せる楽しい場です。是非ご入会下さい。

また例年、婦人会で降誕会のお弁当を婦人会で作っていましたが、今年より降誕会のお弁当は取りやめとさせていただきます。今年の降誕会は布教大会で色々な僧侶のお話が聞けます。どうぞお参り下さい。毎法座のお弁当は注文できますので、どうぞご利用下さい。

編後記  
君たちがどう生きるのかという本が紹介されましたが、なせか一年前の本がヒットするのは、日中戦争が始まったこの年、言論や思想は厳しく統制され、国全体が戦争へ突き進み、世の中は危機感を抱いたのが、著者の吉野源二郎です。民主主義が自由な考え、危険な思想とみなされ、吉野も厳しい弾圧を受けました。自由を生きるこの大切な一歩を、子ども向けの本に込めたのです。この時代が真実と言われます。私は正しさを求めて生きて欲しいという願いを感じました。大臣も大人も読むべきです。

## 安楽寺寺報

# 開光

第86号  
涅槃会号  
2018/2/15

発行所  
〒737-0054  
呉市上山田町2-28  
安楽寺  
TEL0823-21-7561

### だいなし

信楽晃仁

「先立つたものはどうなったのか」そのような問いをもたれたことはありませんか。これはとても大切な問いです。それはいずれ「私はどうなるのか」という問いになります。私たちは近い者との別れを通して、死ということが持つ意味に向き合うことができます。

しかし近頃はその死を自ら問うことなく、安易に死を語るものが多くなつたように思います。そうした場では仏教の教えをぬきにして無自覚に仏教語を使い、亡くなつた者を「仏に成る」「浄土に生まれ」と言い、言葉だけが一人歩きをして、全く内実のないものが、まことしやかに語られている現実があります。そうした現実の中でこの度のテーマ

マを、御正忌に引き続きもう一度取り上げたいと思います。「だいなし」とは日常でもよく使う言葉ですが、この言葉の語源は仏教にあります。国語辞典には「物事がすっかりだめになること」とあり、「台無し」と漢字では書きます。この「台」とは元々仏さまを安置する台のことです。

経典にも「蓮華の台」「蓮華座」とあり、この台に座することは仏に成ることを表しました。つまりその蓮台がないという事は、仏の威厳がない、仏に成れないと言うことを表し「形をなさない」という意味になつたと言います。実際浄土真宗では蓮台のない名号、絵像、仏像全て仏様としては扱わず礼拝の対象になりま



平等院 国宝阿彌陀如来座像

ず、見ず、こしてきました。厳しい話ですが「人間は死んだらお浄土」とか「みな仏に成る」と言う話は、どこにもありません。それなら死んだものはどうなるのか、と言え、迷ったまま亡くなれば、迷い続けるというのが自業自得の道理です。仏法ではそれを六道輪廻するといいました。そして浄土に生まれ、仏に成る事ができるのは、信心を頂

せん。私たちがせっかくご縁を頂き、仏法に出会えたのです。先祖が仏法を残し、私を仏法にあわせてくれました。それを無駄にすることはまさしく先祖のご苦労を「だいなし」にすることです。また私の人生が「台無し」で終わらせない為にどうすればいいのか、それを伝えてきたのが仏教でありお寺なのです。昔からこのことを「後生の一大事」と言い、私たちの人生にとって一番大切な事なのだと言ってきました。しかし現代人はその一大事をおろそかにし、深く考えず、求めることもせず、見ず、こしてきました。

いたものであると親鸞聖人、そして浄土真宗はそれを教えとして伝えてきたのです。経典のどこにも「死人をみな仏にする」とは書かれていないのです。キリスト教であっても全ての人を天国に招くとは言いません。近頃葬儀の場で、それも仏教での葬儀でありながら「天国から見ている」「天国で待っていて」という言葉を耳にするようになりました。全く無茶な話です。仏教ならば、仏道を歩み、それなりの行を完成させた人。浄土真宗でいえば、お念仏によつて信心を得た人が仏になるのです。キリスト教でも、キリストの教えに従い、善行を行ったものが天国へ召されるのです。何もせず、何も考えず、ただ死んだらいいところへ来てた、なんてことがあるはずがありません。そんな事なら四苦八苦するこの人生を頑張つて生きて行く意味はどこにあるのでしょうか。少し考えてみれば明らかかなことですが、それが考えられていないのです。では「先立つたものはどうなった」のでしょうか。それは一言で言えば「わからない」のです。そのことが

# お念佛のしずく

## 「称名と聞名」

真宗の仏道とは、ひとえに念仏して生きてゆくことにきわまるわけですが、ここで注意すべきことは、称名念仏をゆめゆめ条件と考へてはなりません。称名念仏するとう、私自身の行為そのものに価値があると申す念仏に、その私自身の行為に、何かの意味があり、価値があると思つて念仏するならば、それは計らいの念仏、自力の念仏で、まことの真宗念仏ではありません。恐ろしい言葉も言い、魚や卵の生命をも飲みこんでいるこの汚い口から出る念仏に、どうして立派な価値があるといえまじょうか。私が申す念仏には、どれほど懸命に称えようと、何の価値もありません。ただ「南無阿彌陀仏」と念仏を申すとき、その念仏のひびきをおして、私自身の心の内に、その奥底に聞こえてくるものに耳をかたむけ、それを味わつてゆくことが大切なのです。仏と、慈悲と、本願というも、そしてそれを信じるということも、

考えれば考えるほどつりまします。

そこでその所をどう解決すればいいのかと言え、親鸞聖人は『歎異抄』後序に「五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり」と言われました。お念仏に目覚めてみれば、これは私ひとりの為に、私に関わるあらゆる人々が、様々な姿を現じて、私一人を仏に成さんがために、一生の間の大芝居をうって下さったのであったと受け止められたのです。親鸞聖人は『観無量寿経』の提婆や阿闍世といった悪人も、この私を目覚めさせる為に仏が遣わされた菩薩であつたと手をあわされます。そこにたつ事ができた時、私以外の人は皆、還相の菩薩であり、お浄土から私を目覚めさせんがために、私の一生の間つねに着き離れず、私を育ててくれた方々だとはつきりと気づくことができるのです。迷つていたのは私一人、周りには迷う心配ない方々だったので。とはいうものの、なかなか「私一人の為」「私一人が迷つている」という境地には立てません。また中には「仏とも法とも思はず、あんなに



先祖は泣き続け、ご苦労全てが水の泡です。ご苦労を無駄にすることも「だいなし」、私が仏に成れないことも「台無し」です。

放蕩した人が、まさか浄土から、私を導きに来た菩薩なんて、どう考えてもあり得ない」と納得いかなない人もいます。それを『歎異抄』第五条に「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世生生の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり」と、どれほど愛した家族であろうと、神通力のない私には家族がどこにいるのかわかるすべはありません。迷つていられるかもしれない、地獄に落ちているかも知れないが、ひよつとすると浄土から来られた菩薩かもしれない。しかしそれはどちらであつても、私成仏することで、全てが解決するのです。もし仮に私の親が迷うのなら、私が仏に成るしかその迷いを知り、親を救う手立てはありません。また私一人を仏にするために、この世に現れて下さり、私の近くで一生をかけて、私を導いて下さったのであれば、私が仏に成らない限り、私

今まで聞き知つたような、仏や慈悲や本願というものが、どこかに存在して、そういう存在を、念仏によって確かめ、それを信じていくということではありません。そうではなくて、ひたすら念仏するとういう日暮し、その心の深まりの中で、その念仏のひびきをおして、私自身の心の内に、確かに経験され、味識されてくるもの、それが仏といわれ、慈悲と明かさず、本願と語られるものであります。『この道をゆく』



## 安楽寺法要案内

三月	彼岸会	日時 3月11日(日) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 世界人権問題研究センター 源 淳子 先生
四月	花まり	日時 4月14日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 島根 安楽寺 梅田 淳敬 先生 講題 才市さんの言葉 ~私へのメッセージ~
五月	降誕会	日時 5月13日(日) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 近隣法中6名による布教大会 安達高明師、平原弘史師 熊谷栄治師、熊谷純行師他2名 講題 救いということ
六月	永代経	日時 6月16日(土)・17日(日) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 大阪 自然寺 加藤 順教 先生 講題 他力本願 ~幸せになるために生きてきた~

## 「君たちはどう生きるか」

今「君たちはどう生きるか」という本が若い人を中心にベストセラーになっていきます。一九三七年に出版された本ですが、それがこの度漫画になりました。コペル君とよばれる一五歳の少年が叔父さんとの対話を通して成長していく物語です。そのノートには「自分の生き方を決定できるのは自分だけだ」と書かれてい



ます。自分の思い通りの人生なんかひとつもない、むしろ明日の自分ですらわからない事ばかりです。その中でどう生きたいと思えるものを持つという事は、とても大事なことです。また叔父さんのノートには、「ありがたい」という言葉にふれています。「ありがたい」とは「感謝すべきことだ」とかいう意味で使われるが、この言葉のその意味は「めったにないことではない」ということだと書いてあります。私のこの身にうけている幸せがめつたにないことだと気づく時それを感じることができるのだと。私たちがもう「ありがたい」の心で毎日の日暮らしをしていきたいものです。若い人たちがこの本を読んで、少しでも自らを見つめ、昔の人が大切にしていた日本人の心、そして生き方を知ってくれればと思います